2011年 白道会大会

浄土からのメッセージ

―人間よ、同朋たれ！―

尾畑文正先生

去る八月六日・七日、本通支坊で白道会大会が開かれました。今年は同朋大学（名古屋にある真宗大谷派の大学）学長、尾畑文正先生にご多忙の中お越し頂きました。（以下は公開講演会の要旨）。

悲しむ心の回復

三月に東日本大震災と原発事故が起きました。地震や津波は天災ですが、原発事故は究極の人災です。大学の卒業式祝辞で、私は学生にこういいました。

被災された当事者の悲しみはもちろんですが、私たちは、対岸の火事ではなくいかにそのことに悲しみの心を持つことができるのか。今から私たちが人間として一歩を踏み出してゆく上で、大切な鍵となると思います、と。

私たちは、日々安穏に暮らしています。しかしそれは、他者を犠牲にするシステムの上に成り立っている安穏であり平和です。格差が広がり、人と人とのつながりが切り刻まれ、人間であることを見失っている、それは地獄であり畜生の世界です。阿弥陀さまはなぜ本願を誓われ、浄土を建立されたのか。それは、悲しむ心を失い、人でありながら人でなくなっている私たちに、人間を取り戻させ、回復させるためなのです。私たちは人間でありながら地獄・餓鬼・畜生（いかり・むさぼり・愚かな心に縛られた存在）になっている。

私たちは、「悲しみを見すえ、悲しみをふまえて、悲しみを背景にして」あらためて人間として生きると言うことはどういうことかということを問い直していくことが大切です。その意味で、「人間よ、同朋たれ」ということを講題とさせていただきました。

同朋とは

同朋大学の同朋とは人と人との豊かな関係をいいます。

和辻哲郎は、人間とは、人と人との間、間柄存在だといいます。その間柄を失った最たるものが戦争です。私は戦争は政治の敗北だと思っています。戦争をいかに防いでいくか、いかに衝突を避けて平和な国際関係を常態化していくかが政治家の役割。戦争するなら私でも政治家になれる。戦争には間柄がない。「奴は敵だ。敵は殺せ（埴谷雄高）」がその究極。親の決めた結婚で苦しみ、自死せねばならないような世界もそうです。

私と浄土真宗

私はお寺の生まれではありません。私は五人兄弟で四番目。三番目の姉は進行性小児リュウマチで一〇歳で動けなくなりました。母はあちこちの病院をまわりましたがだめで、病気を治すため新興宗教に入信し、必死で信仰していました。

ところが一九五九（昭和三十四）年伊勢湾台風の洪水で姉は溺れ、翌日亡くなってしまいました。十七歳でした。それから母は、命をながらえさせるとか、病気を治す宗教はもういい、人間はだれもが独り生まれ死んでゆく。ならば死ということを通して生きることを考える教えにあいたいと浄土真宗に立ち返っていきました。私は茫然自失、完全に宗教嫌いになりました。しかしそれは、真実でないものを真実とし、頼るべきでないものを頼ってい